

# LW受容協力医師制度の展望

## ルポ——那須の大地に根を下ろした見川泰岳医師の自然体の「看取り」

和室の病室、コタツに障子。源泉かけ流し温泉も。「療養宿」と呼ばれる那須湯本温泉の医院で、「最期まで付き合う」見川医師の日常をルポする。



春風駉蕩とした雰囲気の見川医師(上)。左は、「山医者」と呼ばれた父・泰山医師と若かりし泰岳医師の写真。仏間に飾られていた。



那須湯本温泉の古くからの温泉街から少し入ると、そこは雑木林に囲まれた別荘が点在し、枯れ葉が舞っていた。見川医院は、そんな那須高原の風景に溶け込むような存在。まさに和風旅館のような佇まい。

「そうなんです。母がここで旅館をやってましてね。父が近くで医院を開業し、あとでここを医院にしたんです」と見川泰岳院長(58)。玄関に大きな下駄箱があり、受付の表示も木の札だ。クラシック音楽が流れ、懐かしい昭和の気配に満ちている。「ここはもちろん医院ですけど、『療養宿』と呼ばれます」と、院長は言う。

医院のHPにも「疲れた心、疲れた身体を、いかに自然に回復させるか。人間が本来持っている自然治癒力をどう引き出すか。入院された方が本心に安心感を抱いて、治療に専念できる環境づくり。『療養宿』は、これらのテーマに

真剣に取り組んでいる入院施設です」とうたっている。

案内されて木の温もりの廊下を歩く。いつでも入れる源泉かけ流しの浴槽が二つある。病室は全8室とも和室。室名は「はやぶさ」や「まどり」など鳥の名。コタツに障子。自宅にいるような気分で療養できる。廊下を配膳の女性が行き交っていて、そろそろ小さな食堂は夕食の時間だった。

## 父・泰山医師が戦中ここに無医村に開業

泰岳院長の父・見川泰山(ペンネームは鯛山)は、地元ばかりでなく、広く知られた医師だった。

療を支えてきた父・泰山は12年前に亡くなった。

いま、泰岳院長は、死を目前にした人の苦しみの緩和ケアの施設「ホスピス」に関心を寄せ、2年前、末期がんなどの患者を受け入れるターミナルケア対応の高齢者向け住宅を開設した。医院から歩いて数分ほど。「文月庵」という。末期がんの70代の女性を診療所で看取り、財産の寄付を受けて旧保養所を取得、その意思を実現させたのである。施設の名称は女性の名に因むという。「文月庵」は高台にあつて、テラスからは関東平

野が一望だ。そこに泰岳院長が毎日、訪問診療する。

「在宅の末期がん患者の往診に持っていくものはね、この『笑顔』。笑顔しかないでしょ。そしてただ手を握るだけ。『ワダシノ命はいづまでですか』って聞かれたら、『最期まで付き合いますからダイジョウブ』って答えます」と泰岳院長。

LW受容協力医師になって7年。父の代から深く、那須の大地に根を下ろしていた。

会報編集部・郡司 武

## LW受容協力医師「認定証」決まる！

第2回「LW受容協力医師 活性化対策プロジェクト」が11月25日、本部会議室で開かれ、前回提案された受容協力医師「認定証」について検討。下写真のように決定した。受容協力医師全員に送付する。理事長、副理事長2人、理

事(支部長)3人、事務局スタッフにより、「認定証」の文言はもろろん、枠の紋様、英字表記、ロゴの位置など、デザイン全般について検討が加えられての決定となった。

捗状況について小林理事が報告。夏に行った「受容協力医師活性化アンケート」に対する意見として「受容医に登録されたかどうか通知がない」などの意見が紹介され、「受容医師名簿を会報にどういう形で載せるか、簡易冊子など別な形をとるのか、などを含め検討する」ことになった。(郡司記)

